

無題 (佐久間象山)

已に 逼る 安危の際

誰か 能く 国脈を 培わん

和親 計失に 非ず

辱怯 機 瘦 錯まる

国を 固むるに 自ら 道 有り

戎を 馭するに 自ら 略 有り

折衝 其の人に 存す

豈に 禄と 爵とに 在らんや

已逼安危際 誰能培國脈
和親計非失 辱怯機屢錯
固國自有道 馭戎自有略
折衝存其人 豈在祿與爵

解説 この作は天保十二年に賦された無題詩四首の一である。

語釈 ※已||国の安危の際に直面していることをいう。 ※逼||物事が目の前にびつしりとくつ
ついている。 ※安危際||危機のせとぎわ。 ※誰能||だれにくができるか、の意。 ※培||つちかう。
草木に土をかけ教育するように国脈を育てることをいう。 ※国脈||国家の運命。 ※和親||国と
国との友好。 ※非失||和親論は失策ではないことをいう。 ※辱怯||弱くおくびような様。
※機||和親して国脈を育てるよい折りをいう。 ※錯||和親の機会をはずすことをいう。
※固国||国家の地位を確固安泰にすること。 ※道||目的を達成するための手段、方法。
※馭||諸外国と敵対するのではなく、うまく利用しようという考え。 ※戎||和親を求めている
外国。 ※略||はかりごと。 ※折衝||外国との外交上のかけひき。 ※人||折衝に当たって適任な
人物。 ※祿||仕官する者が受け取る給与。 ※爵||諸侯の世襲的階級をいう。

通釈 すでに国家は危機の瀬戸際に直面している。誰がこの時、国の命脈を保ちうるか。外国
との和親の計画は失策ではなく、外国との和親を恐れ怖がることよって、しばしば好機をは
ずしている。国家の基を固めるには自ずと方策があるものであり、外敵をこちらの手で操り動
かすにも自ずと謀があるものである。外国との交渉は、それに当たる人物によつて成否がかかっ
ている。どうして禄高や身分によつてそういう器の人物が得られようか。